

創刊15年目を迎えて

劔物 修*

斎藤隆雄教授の絶大な御努力により発足した日本循環制御医学会、そして同時にうぶ声を上げた「循環制御」は、15年目を迎えた。編集顧問に山本 亨教授、編集委員は斎藤隆雄教授（主幹）、山本道雄教授、岡田和夫教授、高折益彦教授そして劔物でスタートした。じきに田中一彦先生、安孫子保教授先生が参画され、さらに小柳 仁教授、谷口興一先生、菅 弘之教授、熊澤光生教授と編集委員は充足された。今回、創刊15年目にあたり、小山省三教授、岩月尚文先生、公文啓二先生が加わることとなった。「循環制御」の意図することは、斎藤編集主幹による「創刊のことば」にもあるように、「従来の内科的循環器学や心臓血管外科学とは違った角度からダイナミックな視点から循環を見直してみたい」にあった。編集方針の中では「内容の濃い科学的に価値の高いものを目標に置き、もし雑誌の印象が若干硬くなるとしたら、その分は講座、誌上シンポジウム、症例、質疑応答などでカバーし、平易で読んでおもしろい雑誌にしたい」と記されている。このようなコンセプトのもとに、編集委員は尽力してきたつもりである。巻・号を重ねるにつれて投稿論文は増え、読者の反応も知れるようになってきた。一方、日本循環制御医学会も当初は研究会であり、会員も300人に満たなかったが、今や学会としてのステータスを立派に維持できる1000人の会員を擁するようになっている。歴代の学会長および会員の諸氏には学会および「循環制御」に対する御理解と御支援を心から感謝申し上げたい。

さて、此度、斎藤教授が健康上の理由で編集主

幹を下りられ、小生にその引き継ぎが命ぜられた。同時に、これまで大変お世話になった小玉株式会社出版部から独立し、学会編集室から発行することになった。小玉株式会社の川井重義氏には筆舌に尽くせない御援助を頂戴してきた。編集委員会を代表して心からお礼申し上げたい。編集主幹の地元での作業がより円滑と考え、印刷も北大印刷に移管した。雑誌の編集は大変な仕事と日頃痛感していたが、主幹ともなればことさらである。この重責を全うするように努力する所存であるが、編集委員の方々はもとより会員の皆様のご協力を心からお願いしたい。

これまでは「誌上シンポジウム」が本誌の目玉であったと思うが、今後は日本循環制御医学会のシンポジウムを特集的に取り上げていきたい。もちろん、本誌の誌上シンポジウムにふさわしいテーマがあれば、その都度考慮することは忘れない積もりである。12巻からは学会の機関誌になったことが契機となり、原著論文の投稿が増加しており、中には優秀な学位論文も目立つようになった。これらの論文には高い確率で「循環制御賞」が贈られている。

本誌が、内科、外科、麻酔科、薬理、生理などの専門分野にとらわれず、前編集主幹の御意向を発展的に拡大し、学際的な（ある意味では境界型かも知れないが）医学雑誌として、多くの会員に裨益し、親しまれるものとして行きたい。最近とみに循環制御という言葉にも馴染みと親しさを感じている一人である。

*北海道大学医学部麻酔学講座